第３回

国際ボランティアワークキャンプ in ASO 報告書

2008.10.25(土)～26(日)

第１分科会

「ボランティアを一から始めよう！」

第２分科会

「日本、世界の森林の現状を知り、私たちに出来ることを考えよう！」

第３分科会

書き損じは損じゃない!! 捨てたらただのゴミだけど、その一手間で学校建ったらステキじゃない！

第４分科会

転校生は日本語が分からない。私は日本に来たばかり、あなたはどうする？

第５分科会

高校生の活動を世界へ発信しよう！

国際ボランティアワークキャンプ実行委員会

目的・概要

目的：

高校生～「若い人材」の「生きる力」を育む。

2006,2007 年度と国立阿蘇青少年交流の家で、2 回の国際ボランティアワークキャンプを開催しました。21 世紀の教育におけるキーワードを「国際」と「ボランティア」と位置づけ、高校生が日々の地域でのボランティア活動を点検しながら、自ら企画、運営しました。高校生たちにとって、このワークキャンプは、２１世紀を生き抜く力を育み、地球市民としての資質を磨く機会となりました。

2008 年度のワークキャンプでは、上記２回のワークキャンプの成果を継承しつつ、国際的に関心が高く身近な問題でもある「環境」をテーマに、「思考・討論しあい、知識を深めていく」にとどまらず、「行動する、広めていく」ことを目的に高校生が自ら計画し、運営までをやり遂げる機会にします。（大学生がサポーターとして参加）

過去 2 回、ご指導をいただきました日本ボランティア学習協会代表理事の興梠寛氏にご提案いただいた「GRIP」（計画の掌握）、①「Goal」（目的や目指す願い）②「Role」（参加者の役割）③「Impact」（企画の背景や意義）④「Process」（運営の進め方）という４つの視点から計画・実施することを大切にします。

概略：

・実施年月日　2008 年 10 月 25 日（土）～26 日（日）
・実 施 会 場　国立阿蘇青少年交流の家
　（〒869-2692　熊本県阿蘇市一の宮宮地 6029-1）
・参　加　者　115 名
　内訳　高校生 65 名、大学生 20 名（留学生 13 名含む）
　　団体等関係者 30 名
・主　　催　国際ボランティアワークキャンプ実行委員会
　（高校生、大学生の構成メンバー及び構成団体については、最終ページに記載しています。）
・共　　催　熊本県国際協会
・後　　援　熊本県教育委員会、熊本日日新聞社、（社）日本ユネスコ協会連盟
・ワークショップ協力者（敬称略）

多文化共生：一山静善（宇城市役所）、岩谷美代子（中国帰国者・外国人生徒の進学を支援する会）、竹村朋子（熊本 YMCA）

大学の活動：四方美咲・本崎俊樹（九州看護福祉大学）、溝川史朗（立命館アジア太平洋大学）
※留学生 13 名

国際協力：岩坂省吾・津田美炬（フリーザチルドレン）、稲垣良隆・飯田敏博・吉田智和（JICA 関係者）、神保克己・藤原かおり（熊本 YMCA）、橋村隆介・國武真由美・島川達也（熊本ユネスコ協会）組島枝莉・原田さおり・吉安利江（フェアトレードくまもと）、曽篠恭裕・富永知子（熊本赤十字病院）

環境・地域密着活動：澤克彦（九州環境パートナーシップオフィス）、徳島崇（国立青少年教育振興機構）

アドバイザー：興梠寛（日本ボランティア学習協会）、事務局：勝谷知美・下田隆文・八木浩光

スケジュール

10 月 25 日(土)

9:30	国際交流会館出発（専用貸切バス）
11:20	阿蘇青少年交流の家　到着
11:30	入所オリエンテーション
12:00 ～ 13:00	昼食
13:00	開会式
13:15 ～ 14:15	ワークショップ1（未来へのメッセージ）
14:30 ～ 17:00	分科会 I
17:00 ～ 19:00	夕食、入浴
19:00 ～ 20:30	ワークショップ2（いろんな活動家と出会い話し合う！）
20:45 ～ 21:45	交流会
23:00	就寝

10 月 26 日(日)

7:00	朝のつどい・朝食
9:00 ～ 11:00	分科会 II（前日からのつづき）
11:15 ～ 12:30	分科会報告会
12:30 ～ 12:40	閉会式
12:40	昼食
13:30	阿蘇青少年交流の家　出発（専用貸切バス）
15:30	国際交流会館　到着

ワークショップ１　「未来へのメッセージ」

なぜ、母牛「あやか」は死んだのか

中村那津三（産山村立産山中学校）

「ごみ問題」という言葉を聞いた人は、環境のこと、廃棄物のことなどを考えるだろう。しかし、ごみ問題が命とつながっていることを知っている人がいるだろうか。

私の家には以前、母牛と子牛がいた。母牛の名前は、あやかと言った。冬に子牛を生み、その年の春、野焼きも終わり原野に放つ時がくると、私と祖父はあやかと子牛を連れて野原に続く道を歩いた。祖父が綱を引き、私は、子牛が道をそれないように棒で道をふさいだりした。野原につくと、ロープをはずした。あやかが「モーモー」と大声を上げて仲間を呼ぶ。すると仲間が迎えにきた。あやかと子牛は、仲間の方へ向かっていった。

それが、私と祖父が見たあやかの最後の元気な姿だった。

放牧のあと私は、あやかが元気に過ごしていると思っていた。ある日、祖父が家に急いで入って、テレビを見ていた私に告げた。

「野原の牛の様子がおかしい。」

私は、言葉が出なかった。野原まで母に送ってもらい車を降りた瞬間、一頭の母牛が目に入ってきた。あやかだった。座り込んで牧草を食べていた。あやかは、祖父が来たのを見ると立ち上がった。祖父は、家から持ってきた手作り味噌をあやかと子牛に食べさせたあと、二頭を家へと連れて帰った。途中、あやかはよたよたと歩みが遅い。すると後ろから、子牛が母牛を寄り添うようにしてついてくる。

家に着くと、子牛と母牛を離した。いつもより少し早い乳離れのようだった。子牛は、ロープで結ばれながらも暴れ「メェーメェー」と鳴いていた。私が、

「もう少し一緒にさせてあげたらいいのに。」と独り言を言っていると祖父がいつもより厳しく

「いかん」

と一言だけ言った。そのあとすぐ獣医さんが来て診察があった。お尻から手を牛の体につっこみ調べている。何かを引っ張ろうとするが、牛が痛がって抜けない。そして、こう言われた。

「四つの胃袋の一つにビニール袋がつまっている。」

私は、

「助かるんでしょ。」

と祖父を見ながら言った。祖父は顔色を変えずにあやかを見つめていた。すると獣医さんが続けた。

「手術すれば治るかもしれないが、牛が歳だ。このままでは方法がない。」

夕食後、私は牛小屋の様子を見に行った。あやかは、横になったまま静かに立ち上がろうとしていた。

「大丈夫！きっと治るから。」

「もう、立たなくていいよ。」

私の声がわかるのか、子牛も心配そうにあやかを見つめていた。子牛が「メー」と鳴いた。私は胸の苦しさが大きくなり涙があふれていることに気づいた。なぜ、あやかは死ななきゃならないの。悪いのは、ゴミを捨てた人間でしょう。生き物を殺さないで。軽い気持ちのポイ捨てが命を消そうとしてるのに。

朝、祖父が忙しそうにしていた。あやかが死んだ。私はそう悟った。パジャマ姿で、牛小屋に行きあやかを見た。あやかはまるで眠っているかのように横たわっていた。あやかの遺体を運び出す時に響いた子牛の甲高い「メーメー」という声を私は忘れない。

人間はこれからもゴミを捨て続けるのだろうか。私の学校でもボランティアや清掃活動でゴミ拾いをする。空き缶に混じりビニールゴミが多くある。ビニールゴミを見ると、あのあやかの死んだ朝を思い出す。だから、私は、ゴミを捨てない。絶対、捨てない。なぜならゴミを捨てる事は、生き物の命と、つながっているのだから。

※第 30 回少年の主張全国大会で、内閣総理大臣賞を受賞された、中村那津三さんに当該作文を朗読いただきました。

「地球人になろう～講師・興梠寛先生～」

報告者：高野健太　（熊本県立熊本高等学校）

高校生時代は、よく喧嘩をしたり、海岸を走り回ったりしていた。生きることの意味さえわからない。そんな自分に別れをつげるべく、アメリカ縦断の旅にでた。その道中、ニューヨーク・ワシントンスクェアーのジャズバーに張ってあった１枚のポスターを見た。そのポスターのタイトルは、"What can I do for the world?(世界のために何ができるか？)"。J.F. ケネディが創設した、"Peace Corps(平和部隊)" のポスターだったのだ。私にとってボランティアの存在を強く意識した、意義ある言葉だった。

それから数年後、新聞記者として、５日間にわたる「ボランティア活動推進国際会議」を取材した。さまざまなボランティアの先駆者たちが講演した。人々が自らの力と無限の可能性に目覚め、主体的に自立の道を拓き、その果実を分かちあい共有する、それこそがボランティアの願いであるとの主張、"Small is beautiful!"(小さいことは美しい)―人間の顔をもち、身の丈にあった小さな組織や生態系秩序に合致した等身大の技術こそ、未来への生活様式として引き継がれなくてはならない。それを可能にする社会の力こそ、ボランティアをとおして生まれる無限の力である、との提案。そして「全ての人々にボランティアになるチャンスを」との言葉。この機会を通して、ボランティアの世界へと身を投じることとなった。

一口食べると、もう一口食べたくなる。食べ終わると、小さな種を残し、新しい芽を吹き美しい果実を実らせる。ボランティアは、こんな " 魅惑の林檎 " に似ているのだ。ニュートンは、林檎の木を見つめて " 万有引力の法則 " を発見した。あなたは、ボランティアを体験して、何を発見しますか？

分科会

①「ボランティアを一から始めよう！」

参加者 14 名

報告者：田中千尋（熊本県立熊本高等学校）

第一分科会では、まず熊本高校のボランティアサークル「Hand in Hand」の活動紹介を行いました。わたしたち Hand in Hand ではボランティアをするだけでなく、やってみたい活動を企画、実行しています。そこで、第一分科会に集まったみんなでボランティア活動を企画し、実行するという「１日ボランティア DAY」開催に向けて、話し合いました。

話し合いは、７人ずつ二班に分かれて行いました。それぞれが今まで参加してきたボランティア活動について紹介したり学校での活動を話したりした後、自分がやってみたいことやボランティアに対する想いを語り合って、企画への話を進めていきました。ボランティア活動は未体験！という人もいれば、様々な活動に参加している人もいて、お互いによい刺激を受けることができました。企画についてはみんなが思う「やってみたいこと」を挙げ、その目的や実現可能かどうかを吟味し、徐々にひとつに絞っていきました。特に目的を明確にすることが意外にも難しく、話し合いが難航することもありました。そこには、発表するだけにしたくないというみんなの想いが見受けられ、ボランティア活動の本質に迫る内容となりました。

ここで、二つの班でそれぞれ決定した企画を紹介します。

①ものづくり

自分たちで門松を作ることにより、ものを大切にする心を学び、また、その門松を福祉施設にいらっしゃるお年寄りの方に届け、少しでも温かいお正月を過ごしていただきたい、という企画です。

②エコバック作り

班員みんなで事前に考えたデザインを描いたエコバックを作り、児童施設の子供たちにプレゼントすることによって、エコを身近に感じてもらう企画です。

２日間という短い期間での話し合いでしたが、大学生の方のアドバイスもあって、ここに素晴らしい企画を生むことができました。私たち第一分科会は、これからが本番です。「１日ボランティア DAY」の成功に向けて楽しく進めていきたいと思います。

アクションを起こすことで次世代へつなげていきたいです！

②「日本、世界の森林の現状を知り、私たちにできることを考えよう！」

参加者 12 名

報告者：鶴田千華・齋藤千明・渕本成美（熊本県立芦北高等学校）

フィリピン森づくりボランティアの分科会では、このボランティア活動と森林について知ってもらい、そこから自分たちに何ができるのか？ということについて説明し、その後討論を行いました。１日目は、討論の内容としては、森林に対して感じていること・各学校で行っているあるいは参加したボランティア活動のことなどです。様々な角度から話をして、各々の森林のとらえ方の違いを実感しました。また、いろんなボランティア活動があるということもわかりました。

２日目は、１日目に話し合ったことをみんなでまとめました。また普通高校に通う人は、森林とあまり触れ合う機会が少ないと思ったので林業体験として、丸太切りを行いました。林業をもっと身近で感じてもらいたい、環境をきれいにしたい、森林って凄いんだと感じてもらうためでした。

これらを通して、ボランティア活動に興味を持って積極的に取り組んでいきたいと参加してくれたみんなが思えるきっかけ作りになったのでよかったです。また、これからの私たちの活動にも課題をみつける機会となりました。たくさんのことを話し合って、意見をだしてくれた参加者のみんなに感謝したいです。ありがとうございました。

分科会

③「書き損じハガキプロジェクト」 参加者 17 名

報告者：桂　明日香・龍野由梨加（熊本市立必由館高等学校）

書き損じは損じゃない !! 捨てたらただのゴミだけどその一手間で学校建ったらステキじゃない！

今、世界には学校に行けない子どもが 7,700 万人、読み書きができない大人（15 歳以上）が 7 億 8,100 万人います。私たち、必由館高校では年に一度ネパールに学校を建設する資金として書き損じハガキを集めています。

書き損じハガキ集めの他に私たちにできるボランティアはないだろうかと話し合ったところ、鹿本高校ではプルタブ集め、第一高校では古紙収集などを行っていることが分かりました。また地域では、牛乳パックや食品トレイ、ペットボトルのキャップの回収も行われています。

こんなにたくさんのボランティア活動が地域で行われているのに全然身近に感じることができないのにはどんな要因があるのだろうかと話し合いました。するとボランティア活動が習慣づいていないことや、分別が面倒だ、等の意見が出ました。このようなことを解決するためには、一人ひとりが意識をもっと高める必要があります。回収後のことを勉強し、自分ひとりで頑張るよりも周りの人を巻き込んで活動するのです。そうすれば小さな力も大きな力に変わるのです。何も考えずに捨ててしまうペットボトルのキャップも、集めれば人の命を救うことだってできるのです。

私たちは今回の分科会活動を通して自分が身の回りのボランティア活動に対していかに無知だったかと改めて気づかされました。今世界の現状を知り、一人ひとりが考え、身近で出来ることから少しでも早く行動を始めるべきだと思います。

④「転校生は日本語が分からない。私は日本に来たばかり。あなたはどうする？」 参加者 29 名

報告者：
井野千明（熊本県立大津高等学校）、金　昭伶・申　恵理（私立玉名女子高等学校）、張　炳航（熊本県立北高等学校）、楊　雨明（熊本県立東陵高等学校）

第 4 分科会には、中国、韓国、ドイツ、日本の高校生、そして大学への留学生と一緒になって異文化理解ゲームや歌、そして話し合いを行いました。　参加者の感想です。

・今日は楽しいです。ここは自分の家のようでみんなと一緒にいて嬉しいです。この環境が（雰囲気）が好きです。

・今日はとても楽しかったです。いろんなゲームで遊んだり、交流したり心の中はとても暖かいです。私は来日７ケ月だけど、日本語はまだまだです。この活動に参加することは初めてです。昼食はとてもおいしかったです。「幸せだ」と思います。作文は友達が書いたので、私も書きました。いろんなことを考えました。「これからもがんばりたい」と思います。

・今日は 1 日楽しかったんです。ぜんぜんわからない韓国語で書いてある問題。どんなに簡単でもやっぱり結果が間違いました。でも韓国人でも中国人でもドイツ人でも日本人でも言葉がわからないけど、みんな、仲良くしました。やはり心と心の交流が大切だと思いました。ありがとうございます。

（以上、中国籍の高校生の感想）

・今回、外国人が日本に来た時の気持ちをはじめて知った。最初韓国語や中国語で伝言ゲームをして、全く分からなかった。実際自分が外国に言ったらすごく心細いだろうと思った。でも、そういうつらい思いをしてる人が何人もいることを実感した。これから私にはどういうことができるのだろう。外国の子は優しくておもしろくてすごくいい子ばっかりでもっと仲良くなりたいと思った、その気持ちを表に出して普段の生活でも積極的に関わっていきたい。つらい思いをしている人はたくさんいるので少しでも力になりたい。言葉は全然違っても、言葉以外で通じるものがあった。これから偏見の目をなくし、いろんな人と仲良くなりたいと思った。友情に国の違いは関係ないと思う。

・今日の分科会での活動で、一番感じたことは相手の立場になってみなければ分からないということです。留学生の方がなれない土地と言葉、環境に囲まれてどのようなことを願い、どのように思っているか、というのは、なかなか普段の生活の中で気にかけたり、考えたりすることはありません。だからこそ今回の分科会は参加した人たちにとって非常に意味のあるものになったと思います。留学生は自分たちの思いを知ってもらうきっかけになっただろうし、日本の学生さんは自分たちのあり方を考えるきっかけになったのではないでしょうか。地球は一つなのだから他国は「外国」という考えを捨て、言葉がなくても伝わるコミュニケーションを図っていくべきだと思いました。（以上日本の高校生の感想）

分科会

⑤「ボランティア活動を世界へ発信しよう！」

参加者 16 名

報告者：冨永華子（熊本県立熊本高等学校）

現在、県内外でさまざまな高校生によるボランティア活動が行われています。しかし、どこで、どのような活動が行われているのかという情報を手に入れることは困難で、また、自分たちの活動を発信したいと思っても、その手段がないのが現状です。

そこで私達第５分科会では、『高校生のボランティアの情報ネットワーク作り』をテーマに掲げ、どのようにして情報を共有することが出来るかを考えました。

今回の大きな目標は、『情報ネットワークの作成』です。どのような手段を用いるのか、どのようにすればその情報がより多くの人に伝わるようになるかなどといったことを、私たちが普段どのような情報に興味があって、それらの情報をどのようにして手に入れているのかを考え、参考にしながら話し合いを進めました。

また、情報ネットワーク作りに関すること以外にも、世界の国々のボランティアのあり方についてお話を聞いたり、大学生のボランティアと連携することでより活動の幅を広げることはできないかなどといった提案がされたりと、さまざまな意見を聞くことができました。

この分科会に参加して、県内だけでもたくさんの高校生によるボランティアが行われていることを知り、同時に自分たちの活動を伝え、理解してもらうことの難しさを痛感しました。最終的にインターネットのホームページを利用して情報の共有をしていこうと計画が立てられましたが、実際に運営を始めれば新たに出てくる課題も多いと思います。それでも、参加者全員でアイデアを出し合い、それを実行に移すことができたことや、さまざまな活動に興味を持つ「きっかけ」を作ることができたことはとても有意義なことであったと思います。

最後に、今回この分科会の運営を応援してくださった方々、参加者の皆さん、本当にありがとうございました。

http://www.geocities.jp/aso_highgroupware/

ぜひアクセス !!→

アンケート

★ 一番印象に残った活動は？

・分科会活動　51%　・ワークショップ　25%　・交流会　16%　・全体報告会　8%

★「未来へのメッセージ」を聞いてどうでしたか

・ゴミによって死んだ牛がいるなんて考えもしなかった…　自然を大切にすることは動物を大切にすることにつながる。ボランティア以前に、人間としてすべきこと、してはいけないことを改めて気付かされた。
・環境問題が深刻化している中、今自分が何をすればいいのかを考えることが出来た。今までポイ捨てをしたことを反省し、今後はやめようと思う。
・環境を通して語られる私たちの姿、よりよくするため、今の環境を見つめ直したい。
・誰かがやらないと始まらないので、まずは自分から始めようと思う。
・ボランティアの本当の意味を聞けて、大切さを知った。自分を見つめ直す良い機会となりました。
・ボランティア活動に対するさらなる意欲が湧きました。
・外国では、日本よりも、とてもさかんにボランティア活動が行われていることを知り、私も積極的に参加したいと思った。

★ 分科会に参加してどうでしたか

・ボランティア活動を自ら計画し実行する…　高校生には不可能だと思っていた。しかし、やる気があれば、出来ないことはないことが分かった。
・普段出来ない体験が出来、フィリピンの森林の話しを聞いて、林業の大切さを知った。
・エコキャンプ、缶のプルタブのことを詳しく知ることが出来た。
・在住外国人の辛い気持ちや不安がよく分かった。言葉が分からないことはとても怖いこと。
・ホームページのサイトが出来た！私に出来ることを協力したい。
・他の高校の人たちと交流ができ、真剣に話し合うことが出来た。
・色々な学校での活動を知ることが出来て良かった。
・みんなと討論する難しさを知った。思ったより難しい内容でした。
・自分がどれだけボランティアに関して無知であったかを知りました。
・３カ国語での歌が楽しく分科会全体で１つの家族ように纏まりました。

★ ワークショップに参加してどうでしたか

・いろいろな分野や、国籍の方々と会話して楽しかった。また、他国との文化の相違、他国での環境問題などを知ることができた。フェアトレードのブースにあったオーガニックコットンの触り心地には感動！
・青年海外協力隊について興味があったが HP で調べてもなかなか分からなかったことを、実際の協力隊経験者に直接話しを聞けたことは本当に参加して良かった。
・国際協力活動から多文化共生の活動など海外から身近な活動まで、幅広い活動を知ることができた。
・ベネズエラのことで、蛇やワニを食べるとか、発展途上国のリアルな現状を知ることが出来た。
・ユネスコや赤十字の活動、生活支援の活動などためになるお話しを聞くことが出来た。
・将来の進路に役立つ話が聞けた。
・一年１万円で里親になれることが印象に残った。
・もっと話しが聞きたい。時間が短かった。
・沢山のブースがあるので、時間を決めたほうが良い。

★ ワークキャンプ全体を通しての感想

・ボランティアという言葉の意味について改めて考えさせられた。
・普段は聞くだけで深く考えなかったことを、このキャンプで深く掘り下げて考えることができようになった。自分に出来ることを見つけ、少しづつでも社会に貢献できるように行動したい。
・初めてのボランティア活動への参加ということで不安な面もあったけど、スムーズな進行により、積極的な活動ができた。環境問題に限らない様々な世界の問題、それを深く考える良い機会になった。
・ボランティア活動の大切さを改めて感じました。
・高校生の力が想像以上に大きいことが分かった。
・友達が増え、今後のボランティア活動、生徒会活動に活かせると思います。
・楽しかった、今度は友達も多く誘って参加したい。
・知らない人と１泊２日を一緒に過ごすことに、最初、不安を感じたけど、過ごしていくうちに、どんどん楽しくなって、参加して良かった。
・普段、学校で学べないことを学ぶことが出来て良かったです。

★ 次のワークキャンプに入れて欲しい活動

・１つの分科会だけでなく、時間毎に少しづつでも他の分科会を体験したい。
・参加者の自己紹介（交流会の時）
・阿蘇の自然に触れたい、野外活動、登山、フィールドワーク、運動…
・２泊３日で！（活動と活動の間の休憩的なゆとりが欲しいので）
・もう少し参加者同士が交流できる活動がほしい。
・阿蘇の自然保護活動などの実際のボランティア活動。
・分科会の前のアイスブレーキング
・もっと色々な国の留学生に来て欲しい。
・もっとみんなで遊べる時間が欲しい
・全員で１つのことを話し合う時間があれば良い

★ 今後、ボラキャンの実行委員をやってみたいですか

・Yes　41%　　・No　59%

＊多くの回答をいただきましたが、まとめて掲載している場合があります。

ワークショップ2「"いろんな活動家"と出会い話し合おう」

報告者：後藤佑太朗（熊本県立熊本高等学校）

今回のワークショップは、ボランティア活動を行っている方々をお呼びして、高校生の率直で好奇心にあふれる疑問に答えてもらおうと、開催しました。また、前回が団体ごとにブースを作っていたのに対し、今回は4つのグループ（多文化共生、国際協力、環境・地域密着、大学・留学生）をつくり、各分野で積極的な活動を行っている個人をお呼びすることにしました。その数なんと 40 人（詳細は、2ページ概略：ワークショップ協力者項参照）。たくさんの方々にお越しいただきました。

1日目の夜 19：00 から始まりましたが、開始した途端高校生の皆さんが積極的にブースへ向かい、たくさんの活発な会話がいたるところで聞くことができました。自分の興味のあるブースで、質問をぶつける人や、活動家のお話に一生懸命耳を傾ける人など、皆さん思い思いにブースを回っていました。しかし、1時間 30 分という活動時間は短かったのでしょうか、終了時刻となってもまだまだ話したりない様子のようでした。企画担当した私としてはとてもうれしく思っています。

最後に、今回のワークショップでいろいろなお話を聞いて、ボランティアに対する意識が変わった人もいたのではないでしょうか。また、ワークショップで参加者のボランティアへのきっかけを作ることが出来たのではないでしょうか。そういった点で、私はワークショップは成功だったのではないかと思います。

ワークショップに参加してくださった皆さん、そのほかワークショップに関していろいろとお手伝いをしていただいた事務局の方々、本当にありがとうございました。

全体報告会

報告者：中村直優美（熊本県立熊本高等学校）

ここでは、最後の締めくくりとして、この二日間それぞれの分科会で熱心に話し合ったことを報告し合いました。今回の国際ボランティアワークキャンプでは、『実行へ』というのが念頭にありましたので、それぞれの分科会ごとに、『チャレンジ目標』を掲げてもらいました。どれも内容の濃いものばかりで、皆さんの目も真剣、この二日間の集大成を肌で感じることができました。これからの一歩を踏み出すための情報を共有し得た、とても実りある全体報告会であったと思います。

高校生実行委員会より

報告者：戸野本昌平（熊本県立熊本高等学校）

私たち第 3 回国際ボランティアワークキャンプ実行委員会では、今回のワークキャンプを、「きっかけづくり」と位置づけ、企画・準備してきました。1 泊 2 日の多忙な日程の中ではありましたが、参加者の方々にはそれぞれに有意義なものにして頂いたと感じています。

また、第 2 回の反省を生かし、第 3 回では、これから全体で達成していく目標（アクションプラン）と、個人単位で努力していくチャレンジ目標を、分科会ごとや個人ごとに設定しました。

このことで、ワークキャンプ後にも、ボランティア意識をつなげていくことができました。もちろん、まだまだ、改善点は多くありますが、回を重ねるごとに、より有意義な「ボラキャン」を目指して行って欲しいと思います。

最後になりますが、参加者、実行委員、そして、お世話になった大学生や企業、団体の皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

サポーター（大学生）より

報告者：原田さおり（熊本大学）

今回のワークキャンプで、私はＮＧＯの大学生スタッフとしてワークショップのサポーターを務めることとなりました。しかし私たち（ＮＧＯフェアトレードくまもと）が高校生をサポートした以上にもっと価値あるものを参加者の皆様から頂いたように思います。

私にとっての収穫は、ボランティアの意義を再確認できたということです。興梠氏の講演の中にもあったように、今やボランティアは単なる「奉仕」や「慈善」にとどまらない「自発性に基づく社会変革・創造のための活動」であるという認識が広まりつつあります。その背景には、グローバル化が進んだことによって地球の裏側の情報や商品が日常的に入ってくる一方で、私たちの生活はかつての家族や地域社会の枠組から乖離しつつあるという現実があります。私はこのような状況の中で、若い高校生や大学生がボランティア活動に参加することは、自分が生きる時代を自分の目で確かめ、問題点を発見し、それを改善していくという意味で非常に大事だと考えていますし、この考え方は私がボランティアに参加する動機でもあります。

私が10代だった頃は「なんとなく」高校に進学し、「とりあえず」受験勉強をして、大学にたどり着きました。今考えると大変受け身の中・高校時代を送っていましたが、大学３年生の時にボランティアに出会い、昨年は大学を休学してアフリカへボランティアに行くまでになりました。ボランティアに関わるようになって約４年。高校生の皆さんに（数年ではありますが）人生の先輩として提案したいのは、「21 世紀を逞しく生きる人間」を一緒に目指しましょうということです。そのためには自分の考えを持ってそれを発信できること、相手の考えを理解すること、協働で問題を解決できることが必要だと思っています。それらの力を育成する要素が、この国際ボランティアワークキャンプには詰まっています。このキャンプで得た経験を、自分の生きる地球に還元していきましょう。

実行委員会の皆さん、ステキなキャンプをありがとうございました！

「進歩、進化…成長しつづけるボラキャン！」

事務局　（財）熊本市国際交流振興事業団　八木　浩光

第３回目となる国際ボランティアワークキャンプ（ボラキャンの愛称が板についてきた）は、これまで以上に高校生たちの自主性が際だった！大人は、ぎこちなくても、できるかぎり口を挟まない、高校生が自ら解決していく…、そして、大学生のサポーターがフォローしてくれました。

「サムライ祭」「フィリピンでの植林活動」「書き損じハガキ活動」「共に歩み青春を語る会」など高校生が実際にやっている活動が発表された…「こんなことが私たちに出来るのだ、凄い！？」「やってみよう！」と各自のチャレンジ目標が出来た。そして、１日ボランティアデーやホームページでの情報配信などアクションプランに結びついていきました、素晴らしいことです、感動です。

早くも第４回のボラキャンが楽しみです、そんなボラキャンの実行委員を募集中、我こそと思う方、ご連絡下さいませ！

- Tel 096-359-2121
- e-mail pj-info@kumamoto-if.or.jp

国際ボランティアワークキャンプ実行委員会

■主催構成団体（順不同）

- 国立阿蘇青少年交流の家
- 国際協力機構（JICA）九州国際センター
- （財）熊本 YMCA
- 近代経営研究所
- NPO ヒューマン・ライフ・スクール
- （財）熊本市国際交流振興事業団
- 熊本ユネスコ協会

■事務局

（財）熊本市国際交流振興事業団
（電話 096-359-2121）
URL：http://www.kumamoto-if.or.jp/

■高校生、大学生実行委員メンバー

張　炳航	北高校
田中麻実子	北高校（副実行委員長）
藤田　みな	北高校
楊　雨明	東陵高校
井野　千晶	大津高校
金　昭伶	玉名女子高校
申　恵理	玉名女子高校
高野　健太	熊本高校
後藤佑太朗	熊本高校
戸野本昌平	熊本高校（実行委員長）
中村直優美	熊本高校
田中　千尋	熊本高校
冨永　華子	熊本高校
桂　明日香	必由館高校
龍野由梨加	必由館高校
鶴田　千華	芦北高校
齊藤　千明	芦北高校
渕本　成美	芦北高校
原田さおり	熊本大学
池田　直彦	崇城大学
四方　美咲	九州看護福祉大学
本崎　俊樹	九州看護福祉大学
三隅ちあき	熊本学園大学
組島　枝莉	熊本県立大学
吉安　利江	熊本県立大学